

教育講演 I

人材(財)育成にはたす検査部の役割

和田 隆志*

〔Key Words〕検査部、臨床検査、卒前卒後一貫教育、臨床検査技師

はじめに

検査部(室)をとりまく環境は大きく変貌している。教育・臨床・研究の場において、臨床検査技師に寄せられる期待はいつそう大きくなっていると実感する。精度の高い臨床検査情報の提供はもとよりチーム医療など、より顔の見える活躍の場が広がっている。そのなかで、最先端の科学技術まで網羅する学生教育や卒後教育、厳密な精度管理に裏打ちされた診療支援、研究は人材(財)によることを認識している。本稿では、緒に就いたばかりであるが、我々の取組みを紹介し、検査部がはたすべき人材(財)育成を考えてみたい。

I. 金沢大学附属病院検査部

金沢大学附属病院検査部は、昭和 34 年に創立され平成 21 年 7 月に 50 周年を迎えた。その際、附属病院において、附属病院長、医学類長、保健学類長はじめ関係が深い皆様、歴代の検査部長、現役部員ならびに OB/OG など多くの参列者とともに創立 50 周年記念式典を催した(図 1)。あわせて、これまでの足跡を記した記念誌を発刊した。これまでご指導いただいた関連の皆様への謝意を改めて表す。

検査部は中央診療施設として、金沢大学附属病

院の理念および基本方針に従い、診療はもとより教育、研究活動、地域医療に携わっている。また、病理部、輸血部はじめ各診療科、関連部署と連携し業務にあたっている。現在、臨床検査技師 45 名、医師 7 名、室長(兼務)7 名で構成されている。



図 1 金沢大学附属病院検査部 50 周年記念式典

*金沢大学医薬保健研究域医学系 血液情報統御学・同 附属病院 検査部 twada@m-kanazawa.jp

臨床検査技師のうち、博士課程修了者3名(保健学博士)、博士課程在籍者3名であり、修士課程修了者は18名となっている。私が担当させていただいている医学系血液情報統御学にも、臨床検査技師の資格を有する4名が大学院生(修士、博士課程各2名)が在籍し、大学院進学は浸透してきている。さらに、資格の取得も並行して行っている。二級臨床検査士(21名)はじめ緊急臨床検査士(12名)、超音波検査士(6名)、糖尿病療養指導士(8名)、および医療情報技師(3名)等であるが、これからも積極的に取得する方向である。これらの業績により、各学会などからの賞も受けている。たとえば、平成23年度には日本臨床検査医学会奨励賞、医学教育等関係業務功労者表彰など4名が表彰されている。忘年会において、これらの受賞者、検査部内での学術賞、ルーチン賞などを積極的に表彰し皆で喜びを共有するようにしている。

II. 卒前卒後一貫教育と検査部

検査部がはたす教育への関与は大きい。とくに、卒前卒後一貫教育との関連は深い。教育面においても、我々自身の研鑽はもとより、医学類、保健学類、全国の臨床検査技師やCRCの教育・臨床研修の場として環境を整備し提供している。このうち、臨床検査技師の卒前教育として臨地実習、卒後(生涯)教育を担当、実践している。ここでは卒前教育を行う保健学類(科)との密接な連携が不可欠である。とくに、臨地実習では、現場での“働きがい”を伝えるように配慮している。また、検査部のよりよき理解のために、部長はじめスタッフの講義や懇談の場をもうけている。卒前教育は臨床検査技師だけではなく、医学類でも検査部は重要な役割を担っている。講義に加えて、5年生のBSLでは臨床検査技師からの検査部紹介とレクチャー、6年生のクリニカルクラークシップでは、実際に手を動かしてもらいながら、感染症、生理機能検査、臨床化学など学んでもらっている。薬学類においても、薬学類の教員と協調して臨床検査学の講義を行っている。

卒後教育にも重要な役割を担っている。保健学



図2 平成22年より生涯教育として金沢大学臨床検査セミナーを開催している

類の教員(臨床検査技師)にも現場感覚を維持、ブラッシュアップすることを目的にルーチン業務に加わってもらっている。大学院進学も選択肢として浸透し、他部署や診療科との連携、中央診療施設と協調しながら研究も遂行している。さらに、週一回、医師も交えた抄読会、勉強会、認定技師などの資格取得を積極的に行っている。学会発表は国際学会、全国学会はじめ若手の臨床検査技師も交えて屋根瓦方式で発表し、その準備や経験を通じて学びの場になることを願っている。

さらに、臨床検査技師の生涯教育の場としての検査部を意識している。平成22年より開始した金沢大学臨床検査セミナーでは北陸3県の臨床検査技師、保健学類の教員、大学院生、学生など幅広く対象とし、最新の情報や取組みを共有することを目的としている。医学系、保健学系の大学院の履修、技師会の単位になるように配慮している。多くの参列者により熱心な討議が行われ、手応えを実感している(図2)。検査部、金沢大学保健学類、そして外部から著名な講演者を招き、それぞれの取り組みを紹介してもらうとともに、相互交流や共同研究を展開している。

III. 臨床と検査部

臨床の現場は卒前卒後一貫教育と密接に関連する。検査部はルーチン検査はもとより、患者情報にいち早く接することができる部署であり、かつ先端医学・医療の臨床への還元を具現化できるところともいえる。我々のキーワードは“患者さん

のために”であり、中央診療施設として、金沢大学附属病院の理念および基本方針に従い診療にあたっている。厳格な精度管理のもと、診療支援を行うとともに、顔がみえる検査部を目指して活動を展開している。可能な限り診療科はじめ種々の要望にそっていくとともに、院内活動に積極的に参加することを心がけている。たとえば、NST業務、糖尿病教室、院内講演会などに参加、貢献している。これらとあわせて、金沢大学臨床検査マニュアルや採血室や検査部からのニュースレター(図3)など日常臨床で役立つ情報やピットホール等を発信している。とくに、金沢大学臨床検査マニュアルは平成2年7月に創立30周年の記念事業の一環として初版が刊行された。以来、多くの方々にご利用頂き、温かいご助言を頂きながら、20年の歳月とともに平成22年に第6版と改訂を重ね、内容を充実させてきた。現在、第7版の改訂作業中である。また、平成21年から、利用して頂く皆様の利便性を考え、附属病院ホームペー

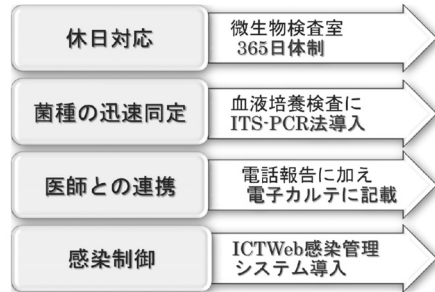


図4 感染症診療と検査部

ジでも閲覧可能としている。さらに、各診療科、関連部署においても感染症は重要な対象である。附属病院の感染対策室と密接に連携し、休日対応、菌種の迅速対応、ICTWeb感染管理システム導入によるアウトブレイク早期察知など感染制御等を通じて感染症診療に携わっている(図4)。さらに、平成24年3月よりISO15189の認定施設となり、一層のブラッシュアップを誓っている。これら一連の取組みがよりよい卒前卒後一貫教育にリンクすることを願っている。

IV. 研究と検査部

大学院進学も選択肢として浸透し、他部署や診療科との連携、中央診療施設と協調しながら研究も遂行している。検査部は各診療科からの臨床情報が集約される。そのため、適切な倫理審査を経たのち、各診療科と共有することも可能となる。そこでは、膨大な情報が得られる入口としての検査部、そして、新規の臨床検査を臨床に応用する出口ともいえるべき場として検査部には少なくともふたつの要素がある。すなわち、検査部と研究を考える場合、入口戦略と出口戦略との両者の視点でとらえることが可能だと思う。さらに、臨床検査技師の卒前卒後一貫教育を考えるうえで、日々の業務と研究は車の両輪のように思われる。すなわち、右眼でルーチン業務からえられた貴重な知見をみて、左眼で基礎研究・臨床研究の視点をもつ、そして両者をあわせて立体視することで病態への理解が深まり、さらなる発展が期待されるように感じる。この双方向性の視点(視野)は医師だけではなく、臨床検査技師の成長にも重要である

検査部ニュース No.7 2012年8月

血液培養検査についてお知らせとお願いがあります。

●培養陽性時は以下の面情報(中間報告)を電話連絡しています●

グラム陽性球菌

グラム陰性桿菌

グラム陽性桿菌

酵母様真菌

血液培養検査は重症感染症診断のための重要な検査です。微生物検査室では、患者さんに適切な処置を早期に行えるよう血液培養陽性時に面情報を中間報告として電話連絡しています。

●血液培養ボトル提出時の注意点●

① ボトルには必ず検体ラベルの添付をお願いします。

② ボトルの提出は微生物検査室入口の箱へお願いします。冷蔵庫提出厳禁です!!

* 不明な点は、微生物検査室(内線 7156)へお問い合わせ下さい。

図3 顔がみえる検査部を目指して積極的に情報を発信している



図5 検査部のロゴ

と感じられる。この全身の病態への理解を検査を通じて行いたいとの願いをこめて検査部のロゴを作成した(図5)。アイデアを募り、最終投票で決定した力作である。すでに、検査部から発信する研究情報などに使用し始めている。

検査部での研究のキーワードは上述の入口戦略と出口戦略の両者を意識し、“検査部にしかできない視点で研究を行う”である。順次、各診療科とともに研究を展開している。このうち、新規の臨床検査のシーズは臨床応用を考える上で論を待つことなく重要と考えている。一つの例として、実際の症例から抗エリスロポエチン抗体¹⁾、抗エリスロポエチン受容体抗体²⁾を同定し、測定法を樹立した(特願 2007-130756)。入口戦略を深めるとともに、これらシーズの更なる開発ならびに臨床検査診断への臨床応用を展開していきたい。

おわりにあたり

我々の緒についたばかりの取組みを中心に記載したが、とくに際立ったものはなく汗顔の至りである。忌憚のないご意見を伺い、学ばせていただ

ければ幸いである。一方、厳密な精度管理に裏打ちされた診療支援、最先端の科学技術まで網羅する学生教育、専門性の高い新規臨床検査の開発と臨床応用は、人材(財)によることを強く認識している。今後も多くの方々に英知を学び、次世代を担う人材(財)が育つ環境を持つ検査部としてさらに精進したい。学外の共同研究の推進とともに、医師会、基幹施設とも密接に連携し、精度管理、データ共有化など臨床検査の質の向上を通じて地域医療と生涯教育にも貢献したいと考えている。その過程を通じて逞しい人材(財)が育ってくれることを願ってやまない。最後に、教育講演の機会を御与えいただいた第7回臨床検査学教育学会学術大会 寺平良治大会長はじめ関係の皆様、検査部の皆様、各診療科、関連部署、共同研究者の方々に深甚なる謝意を表する。

文 献

- 1) Hara A, Wada T, Kitajima S, Toyama T, Okumura T, Kitagawa K, et al. Combined pure red cell aplasia and autoimmune hemolytic anemia in systemic lupus erythematosus with anti-erythropoietin autoantibodies. *Am J Hematol* 2008; 83: 750-2.
- 2) Hara A, Furuichi K, Higuchi M, Iwata Y, Sakai N, Kaneko S, et al. Autoantibodies to erythropoietin receptor in patients with immune-mediated diseases: relationship to anemia with erythroid hypoplasia. *Br J Haematol* in press